近江商人の「三方よし」の思想と並び日本のCSRの原点として脚光浴びる石田梅岩とは･･･

石田梅岩の生誕の地を訪ねる

丹波國一宮出雲大社宮参拝と和らぎの道･亀岡城跡お花見バスツアー

日　時：２０１１年4月9日(土)

石田梅岩の紹介：心学明誠舎理事・下野譲氏（熟塾塾生）

行程：大阪駅「桜橋改札前」集合⇒石田梅岩生家跡⇒丹波國一之宮出雲大社宮正式参拝⇒和やらぎの道お花見散策⇒楽々荘にて“花籠弁当”の昼食⇒亀岡城跡散策⇒大石酒造「酒の館」見学⇒ガレリア亀岡にて石田梅岩の講席の場復元展示見学⇒大阪駅⇒淀屋橋⇒難波駅⇒天王寺駅解散

石田梅岩の生誕の地を訪ねるバスツアーを企画した。
前日は雨、それも大雨。夜中に激しい雨音を聞く。雨雲退散を祈りながら眠りについた。早朝、小雨が少し残っていた。チャーターしたバスは八尾・平野・天王寺駅から大阪駅を巡り、８時半過ぎに亀岡に向かって出発。バスの中で参加者からの自己紹介後、まずはこのバスツアーのメインテーマである【石田梅岩とは】について、心学明誠舎の理事で、熟塾の古株塾生の下野譲さんより、バスの中で講義頂いた。

石門心学について

下野でございます。石門心学についてお話させていただきます。現在商人道とは何かということが問われています。企業の不祥事が続出しているからだと思います。企業はコンプライアンス（法令順守）の強化ということで体制の強化を図ってきましたが、不祥事は後を絶ちません。本当の意味で商人道とは何か問い直してみなければならない時代になっています。一方でグローバル資本主義経済の影響があると思います。企業が株価や配当を気にして経営されることによってお金を儲ける事を重視した結果、評価の対象が変わってきたことに対する反省があると思います。会社は株主のものというアメリカ式企業経営では短期の利益追求が求められますがそれでよいのでしょうか？CSR(corporate social responsibility)では「持続可能なビジネスの成功のためには、社会的責任ある行動が必要であるという認識を企業が深め、事業活動や、ステークホルダーとの相互関係に社会問題、環境問題を自主的に取り入れる企業姿勢が求められているのです。持続可能とはサステイナビィティというもので将来の世代まで考えるということです。

石田梅岩は１６８５年京都亀岡の農家に生まれました。子供の頃は勘平と呼ばれました。ある日勘平が栗を拾って帰ると父が何処で拾ったか聞きました。そこには内の栗の木はないから隣の栗だ、返してきなさいと言われて反しに行ったと伝えられています。京都の呉服商で番頭まで上りました。この間、儒教、仏教、神道などの学問修行に励み、悟りを開いて４５歳から京都で開講しました。梅岩は６０歳で亡くなりましたが、門人たちによる心学講舎は全国に広まり、最盛期は全国に１８０の心学講舎が庶民教育に当たり、日本人に大きな影響を与えました。中でも手島堵庵（1718～1786）は石田梅岩の教えを心の学問、心学と名付け石田梅岩の心学ということで石門心学と呼ばれるようになりました。

堺屋太一は日本の国を作った 12 人で聖徳太子や松下幸之助を取り上げていますが、この中で石田梅岩のことを日本人の国民性に大きな影響を与えた人として取り上げています。
梅岩の時代は士農工商の時代で税を納めている農民に比べ社会的な地位が低く、山鹿素行、太宰春台などの学者は商人は甘き毒を喰らいてと利を貪る人たちとして評価していました。商人は利を知って義をしらない。ただ己が身を利す事のみ志す。商人というのは悪知恵をもって一発の利益を狙うもっとも卑しきものである，などと述べています。大坂淀屋橋にありました、淀屋が天井をガラス張りにして金魚を飼うなどというような、贅沢をして取り潰しにあった時代でもありました。この時代に石田梅岩は商人の正当な利益は武士の禄と同じと言っています。

石田梅岩の思想の中で第一に挙げたいのはお客様満足の精神です。お客様に喜んでいただける商品やサービスを提供したら必ずお金を払っていただける、利益の源泉はこれだよと言っています。お客様が喜ぶと売った商人も喜ぶ、この輪が広がってみんなが喜ぶ。これを平和という。だから商人が仕事をして利益を出すということが社会に役立つ。これが社会的責任を果たすということに通ずると言っています。いまは市場主義の時代です。市場主義ということは市場で勝った商品、勝った企業が繁栄する。これが市場主義の原理です。そのときに大事な点は何かというと、お客様に喜んでいただけるかどうかということです。先義、後利なのです。

次に**梅岩は勤勉、正直、倹約を人々に説きました。**勤勉はまじめに一生懸命働くということで

す。人は労働によって食を得る形に生まれており、その心を持っているので、身を苦労し努めれば『心は安楽になる』と説きます。私は生涯現役として働こうと考えています。そのほうが健康にもよいと考えています。
正直はだまさない、嘘をつかない、ということでしょうか。最近不当表示などが目立ちます。生産地の誤表示。製品の間違い表示など、お金をもうけようとする人々が多く、外国産の製品を日本国内産と表示したり、様々な企業不正で信用を無くしています。信用は企業にとってもっとも大切なものでこれに反することをすれば企業は存続をすることが出来なくなるのです。実際、不祥事により、社会から消滅した会社はたくさんあります。信用を無くした会社は存続を許されないのです。
商いは『先もたち，我も立ち』ということが大切だいっていますが、これはお客様を大切にするという共生の考え方であり、企業の社会的責任にも通ずるものです。今企業の社会的責任が声高に叫ばれているのも企業が継続するには大切な理念です。大阪や京都の商家には家訓が設定されていますが石田梅岩の考え方が反映されています。

倹約とは『物の効用を尽くす」ことです。『世界に三つ要るものを二つにてすむようにするを倹約と言う」と言っています。今最も必要とされている省資源、環境保全につながる考え方です。大量消費では地球はその存続を許されなくなってきています。
石田梅岩の教えを弟子たちは国民に普及させようといろいろ努力しました。その中で特筆されるものが心学道話です。庶民の生活を題材に正直に生きることを面白く話しました。現在も心学道話集が残っています。私たちはこの道話を落語で現代版の道話として復活しました。林家染雀さんに都鄙問答として演じていただいています。１８０もあった心学講舎のうち、大阪の心学明誠舎は発足以来 225 年の長きにわたり、庶民教育に従事してきました。文部科学省認可の第一号の社団法人として、現在実質的にセミナーや講演会などの普及活動をしている唯一といってもいい、心学講舎です。現在公開のセミナーや、今回実施する現代版心学道話や心学講演会など啓蒙普及活動を行っています。心学明誠舎舎員の会費は年間参千円です。どうかお入りいただきましてご一緒に学んでいただきたいと思います。
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

石田梅岩生家跡を訪ねる

ちょうど講義が終わったころに、バスは早春の石田梅岩の生家跡にたどり着いた。杉林に囲まれた石田梅岩の墓地がありそれぞれにお参りしたあと、生家跡看板前で記念写真を撮った。

石田梅岩はこの地に、農家の二男として誕生した。次男であるがゆえに、長男に家を頼み、自活するために、生家を後に京都の商家に奉公に出る。梅岩梅岩は生涯独身を通した為直径の子孫はいない。本家筋にあたる石田次郎さんがご健在で今もその生家跡を守っておられ、バスツアーの下見に伺った時にお会いしたが、「景気が悪くなるたびに、石田梅岩が検証されるんですよ」という言葉が印象的だった。バブルに浮かれていた時代には、勤勉・正直・倹約などという言葉など世の中の底の底に沈みきっていたが、景気低迷・国内産業の空洞化・企業の不祥事・高齢化と課題山積の中での、３月１１日の東日本大震災という洗礼を受けた日本は、正に原点に戻って、日本人が積み上げた人生の指針の再構築の見直しが求められている。
地震・津波という自然災害のうえに、東電の原子力発電所の放射能漏れは、便利な近代的な生活が実は、原子力という一たび事故が起これば自らを傷つけるかなりサディスティックで危うい力を借りて成り立っている現実を直視することになった。もともと日本は島国で、限られた資源を次の世代をも視野に入れ何代にもわたって大切に使い、野に咲く一輪の花に四季に移ろう自然の存在を愛でながら心の豊かに変えてきた。金銭や物、安易な便利さのみをひたすら求めてきた戦後の日本。
下野さんの講義を聴きながら、正に、これからの時代は、勤勉・正直・倹約を唱えた梅岩の声に導かれての日本再生になるのかもしれないと思った。

丹波國一之宮出雲大社宮正式参拝

バスに揺られること３０分、田園風景の中に、桜が右に左に春の日差しに薄紅色に輝いている。やがて通称「元出雲」と呼ばれ、拝殿の背後に「千年山」という神体山があることから「千年宮」とも呼ばれる話題のパワースポットの丹波國一之宮出雲大社宮前にバスは辿りつく。
島根県にある出雲大社は明治時代に至るまで杵築大社を称していたため、江戸時代末までは出雲神社と言えばこの出雲大神宮を指しており、本殿は重要文化財。境内に湧き出る真名井の水は「御神水」でミネラルバランスよく名水として有名。まずはその聖水で口を漱ぎ手を清め、正式参拝のために拝殿の中に入り、拝殿に向かって並べられた椅子に参加者が腰を掛け

た。拝殿右手のしだれ桜は夜半からの雨に洗われ深い紅色の花が潤っている。若い神職が入場し、祝詞をあげお祓いするたびに、山から吹き込んでくる春風も参拝者の心を清めるように通り過ぎていく。最後に下野さんが榊を納め、正式参拝終了。各自にお守りと、皆さんでと一升瓶のお神酒をお下がりにいただき、千年山を従えた本殿前で写真を撮った。

和やらぎの道お花見散策

出雲大社宮から、バスで約５分。近くの老木・若木の桜が約 1500 本咲き競う七谷川堤周辺に整備された「和らぎの道」を散策した。満開の桜のトンネルは約２キロにわたって続いている。京都の哲学の道のような様相だが、訪ねくる人は多くなく、露天商や乱痴気騒ぎの宴もなく、田園風景の中にただひたすら川沿いの桜が見事に咲いている。すでに雨雲は退散し青空の下に咲き初めし桜の初々しい微笑みがなんとも嬉しい。恋人どうしなら、桜のトンネルの下を、春風をまといながら日がな一日二人静かに散策することもできるが、お昼すぎとなりお腹の虫が騒ぎだしたバスツアーの一群は、３０分程桜のトンネル散策を楽しんで、バスに舞い戻った。

楽々荘にて“ 花籠弁当 ”の昼食

亀岡市街に入り、総敷地 1750 坪のトロッコ列車として有名な旧山陰線生みの親、田中源太郎翁の明治時代の旧邸「楽々荘」の国登録有形文化財邸内の書院造りの和館内の奥様のお部屋で先ずはビールで乾杯。「花籠弁当」に出雲大社宮で頂いた一升瓶のお神酒の日本酒を回し飲む。食後はトロッコ列車のトンネルや鉄橋と同じレンガをつかった洋館や、山縣有朋の別荘「無隣庵」や平安神宮神苑等の庭で近代造園の総合プロデューサーとして有名な七代目小川治兵衛が手掛けた 700 坪の回遊式池泉庭園も見学。

ゆっくりランチタイムを楽しんだ後、楽々荘の玄関で記念写真撮影。

亀岡城跡散策

すっかり晴天に恵まれた亀岡市街を亀山城跡まで散策した。亀岡駅前には亀山城の外堀の桜並木も満開で、お濠でもアヒルや水鳥が春の日差しを楽しんでいる。

亀岡城：亀岡は古くは亀山と呼ばれていたが、伊勢の亀山と区別するため明治になって亀山に変えられた。亀岡城は天正５年(1577)に織田信長の命により明智光秀が築いたものであり、光秀はこの城を拠点に"丹波の光秀"の名を馳せた。天正１０年、明智光秀は亀岡の城で中国出兵の準備を整えたが、六月一日この城から出陣、京本能寺に信長を倒した。山崎の戦いののち羽柴秀勝が居城したが、その後度々城主が替わり、慶長１４年(1609)岡部長盛が城主のとき大坂の豊臣氏に対する包囲網の一環として天下普請の大改築が行われた。このとき天守は藤堂高虎が造った伊予今治城の五層の天守が移築され、二ノ丸北櫓・大手門などが建設され、三ノ丸の拡張なども含め、亀山藩政の中心として整備された。城は、北側壁を大堰川に洗われた台地上にあり、本丸から同心円状に二ノ丸、三ノ丸が広がり、本丸のほぼ中央に天守があり、塁線の多聞櫓から独立している。明治初期の写真および絵図面によれば、天守は五層で、その高さは十二間五尺九寸、

また天主台の高さは三間であった。天守内部へは、西側の小天守から出入りしていた。天守の外観は五階に唐破風屋根と高欄がある以外は、全体的に装飾面は乏しい。ただ、当時としては珍しい層塔型天守であった。本丸等の石垣は大正、昭和期に大部分積み直されているが、当時の石自体は多く残っており、天下普請の刻印が数多く見られる。以後、火災・地震の破損修理等はあったが、城内の構造は基本的に変化せず、明治維新まで続いた。
明治１０年(1877)廃城となり､城は取り壊され、城址は民間に払い下げられた。大正８年(1919)本丸・二ノ丸が大本教の所有となっており、荒れていた石垣は信者によって積み戻され、能舞台もある本堂などの建物や庭が整備されていた。今回は大本教の広報担当者に案内いただき城跡を散策した。本丸は教祖様の居住空間となり一般の信者も立ち入ることができない聖域となっていたが、台所の古井戸や城壁は明智光秀が信長征伐の為に出兵した日のままだと思うと、歴史ロマンを感じずにはいられなかった。明智光秀お手植えの二代目の樹齢 190 年の大銀杏の大木の姿を本丸に見る。もし不動産会社に城跡が購入されていたら、駅前開発と称して堀や城壁は無事だったろうか…。史跡保存の難しさを考えながらの散策ともなった。

異次元のような亀岡城跡をあとに、桜並木が続くお濠沿をバックに記念写真を撮る。

大石酒造「酒の館」見学

亀岡駅前の横断歩道前で、歩き疲れた参加者がチャーターしたバスに乗り込む。バスの中で、３時のおやつとして**福寿堂秀信の桜餅**と冷えたお茶を味わう。桜餅は程よく甘く、桜の葉の香りが優しく口の中に広がり、大好評。目で楽しむ桜に味わう桜餅も満喫しながら、バスで 10 分ほど揺られて、創業元禄元年 300 年続く丹波・大石酒造㈱の「酒の館」に到着。館内で、丹波の国・亀岡で元禄年間に庄屋から独立をし、初代・大石太郎兵衛が、「太郎兵衛酒屋」を創立。その後明治時代には、「酒喜屋」の屋号で地元の造り酒屋として親しまれ、昭和の時代に「東酒屋」に改称、戦後は大石酒造と改め、今も秋から春にかけてベテランの丹波杜氏達による伝統的な手造りによる生配仕込み、寒仕込により製造れている日本酒造りの工程等との説明を受けた後、自由に酒蔵試飲したり買い物したりとして過ごした。

道の駅ガレリア亀岡にて
石田梅岩の講席の場復元展示を見学

そして、最終、道の駅ガレリア亀岡に立ち寄り、心学講舎石田梅岩の講席の場を復元展示しているコーナーを見学。遺品の机や長い線香一本が燃え尽きるまでの時間を一講座として授業していた等の往時の教室が再現されていた。男女の席は分かれていたが、同じように授業を受けることが許されていた。

満開の桜の面影を、夕焼けの茜雲に重ねながら、バスはまた亀岡から茨木に抜ける山道を大阪に向かって駆け抜けた。
　人間はどう生きるべきかを求め続けた石田梅岩の思いに、『時は今 雨が下しる 五月哉』との歌を詠みあの亀岡城から主君信長を討つ決意を胸に出陣した明智光秀の思い…亀岡歴史散策の中に桜も満開。思い出深い一期一会の春を寿ぐお花見バスとなった。（原田彰子）

参加者：塾生：北原祥三・木村正治・熊谷京子・下野譲・中島一・原田彰子・浜田真弓・本田伊都子・丸山公子・宮本雅彦・宮本麗子・森欣子・森川千世子・村上福壽郎・米川俊信
一般：枝松緑・鈴木常勝・武安英夫・田村昭子・田村久信・辻本智子・中島圓・西口由美・長谷川裕子・森田秀朗・山田節子（敬称略）